

違和感はなかったものと思う。初めて蒲団型太鼓台が登場するのは、恐らく江戸中期以降であると思われるので、神様の寝具である蒲団(敷蒲団)として採用されたのではないかと推理する。

3. 最初に積んだのは、座具の「蒲団」なのか、寝具の「蒲団」なのか。

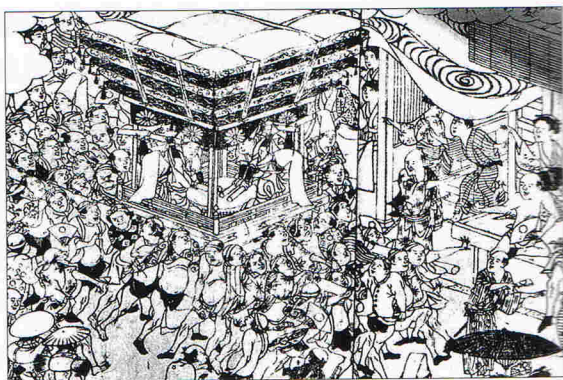
実は、円い座具の蒲団を積んだ太鼓台も、そうではない(蒲団を積まないものも含め)簡素な太鼓台すらも、全て、江戸時代以前には登場している形跡が見当たらないのである。「太鼓台に、円い座具の蒲団を積んだのではないか」との論拠は、あくまでも「太鼓台が、座具の蒲団の時代から存在していた」との前提条件が付いての話である。これまで見たように、時代的には方形の寝具の蒲団(敷蒲団を指す)は、円い座具の蒲団より後代に登場したものである。しかし、座具の蒲団の時代に太鼓台そのものが存在しない以上、「太鼓台に座具の円い蒲団を積む」の論拠は成り立たなくなる。太鼓台はそれほど古い時代には存在していなかったというのが、私たち太鼓台文化を学ぶ間での常識なのである。

太鼓台は今から高々三百年程前の記録にしかない(実際にはもう少し前の時代から登場していると考えられるが、残念ながらそれが証明できない)のであるが、勿論その時代の太鼓台を実際に見ることなどできる訳がない。当然ながら、簡素・小型の太鼓台に、当時の太鼓台の疑似体験の任を負わせることとなる。私がこれまでに見学してきた太鼓台のうち、最も簡素な部類に属すると思われる現存する太鼓台と、絵画史料として今に伝えられている、それぞれ何ヶ所かの太鼓台を以下に紹介する。勿論、これら全ては江戸時代以降に出現したものと思われる。これらの太鼓台の年代的な順位付けをすることはできないが、いずれもが古い形態を伝えていると思われる。このうち、現役の太鼓台の中で伝来した時代が推定できるのは宇屋の「だんじり舞」で、享和3年(1803)に氏神遷宮の際に奉納されたのが始まりとされている。当時の庄屋と上方からの流人との合作(隠岐島は流人の島)と伝えている。(『隠岐の民謡』近藤武氏・著1989刊)



簡素な太鼓台。左から愛媛県鬼北町小倉「四ツ太鼓」、島根県隠岐の島町宇屋「だんじり舞」、宮崎県北浦町阿蘇「だんじり」

絵画史料には、当時の“豪華な太鼓台”が描かれているものと想像でき、今と比較しても大きさは小さいが、それほど簡素なものとも限らないものが見える。『撰津名所図会』の「蒲団型太鼓台」(寛政10年・1798)、小豆島町亀山八幡神社の蒲団型の「太鼓台」(文化9年・1812)、加古川市の「神吉八幡神社御神事絵図」の蒲団型の太鼓台(御先太鼓と表記、文政3年・1820)あたりが、年代的には古いものである。



『撰津名所図会』の蒲団型太鼓台